

NHKテキスト

NHKの総合福祉テキスト

社会福祉セミナー

2012年12月 → 2013年3月



ラジオ第2放送

土曜日 午後 6:45 ~ 7:10
日曜日 午後 0:15 ~ 0:40 (再放送)

放送講座

- 12月 福祉ボランティアの役割
- 1月 認知症の人の生活支援
- 2月 社会福祉のあゆみ
- 3月 障害者の福祉を考える



月～木曜 午後 8:00 ~ 8:29
翌週月～木曜 午後 1:05 ~ 1:34 (再放送)

放送抄録

特集・子どもたちの未来を考える

私の声を聞いてください
——精神疾患の親と暮らす子どもたち

Our Voices「親と子」
発達障害×虐待

未来へのアクション
File5 君の夢、応援します

公開すこやか長寿
簡単！ながら運動で若返る



■巻頭カラー
ロンドンパラリンピック
おめでとう！金メダル

■インタビュー
NPO法人 社会的養護の当事者参加推進団体
日向ぼっこ理事長 渡井さゆり

■トピック
貧困・労働問題をどう教えるか
——ホームレスから考える

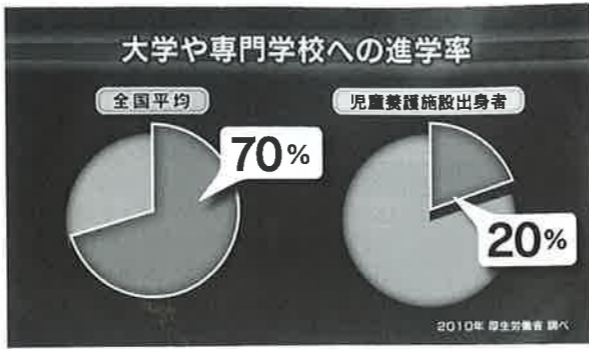
罪を犯した障がいのある人を
どう支援するか
——再犯防止と自立更生に向けた支援

■福祉の潮流 2012-2013
尊厳死・終末期医療問題の行方



NPO法人・ブリッジフォースマイル代表の林恵子さん

【図1】児童養護施設出身者の厳しい進学率



「って言われたのですね。チャレンジしてごらんという環境を作らない状態で、無責任に子どもに関わっているのに自分が納得できなかった。——将来の夢すら持てない子どもたちのために、林さんは経済的援助だけではなく意欲を支える仕組みを考えました。それはコンテストに出場する若者を大人たちがチームで支えていくことです。あきひろさんを支えるのは年齢も職業も異なる三人のボランティアです。スピーチのためのミーティングで、メンバーから、過去の体験についてもっと具体的に書いたほうが伝わるのではないかと、という意見が出ました。あきひろ 公の場で、どうつらかったとか言っても、たぶん同情しかもらえないんだよね。僕の立場に誰もなれないから。石本 そうだね。お涙ちょうだいをやろうという気はさらさらないのはわかるから、あえてそここ



津田大介さん(左)と、内藤大助さん

児童養護施設の子どもの現実

山田 児童養護施設で暮らす子どもたちが抱いた夢を実現させるのは、大変難しい状況にあります。今、親の離婚、貧困や虐待などの理由から家族と離れて児童養護施設で暮らす子どもたちの数は全国で三万人にのぼります。その子どもたちは原則一八歳になるとそ

未来へのアクション File 5
君の夢、応援します
(公開収録@早稲田大学)

放送抄録 2012年7月31日・8月7日(再)/10月16日(再)

ジャーナリスト 津田大介(ただ・だいすけ)
タレント・元WBC世界フライ級王者 内藤大助(ないとう・だいすけ)
NPO法人「ブリッジフォースマイル」代表 林恵子(はやし・けいこ)
聞き手 山田賢治(やまだ・けんじ)

児童養護施設に暮らす子どもの多くは、「経済的な理由」により、大学や専門学校に進学することが困難です。「こうした状況を変えたい」と立ち上がった、NPOとボランティアの挑戦を伝えます。

の施設を出なければいけません。これは大学や専門学校への進学率を表したグラフです【図1】。全国平均だと約七〇%ですが、児童養護施設の出身者だとその三分の一以下、約二〇%という現実があります。そういった子どもたちを支援しようと活動しているNPOがあります。

——神奈川県にある音楽大学。新入生のあきひろさん(一八歳)。今年三月、児童養護施設を出て一人暮らしをしながら大学で学んでいます。夢はプロのトランペット奏者。あきひろさんは親からの援助を受けられないため、学費や生活費など年間一〇〇万円余りを自力で工面しなければなりません。あきひろさんは幼いころに母親が病死、その後、父親と連絡がとれなくなり、そのため九歳のとき兄と一緒に児童養護施設に入りました。日々の寂しさをまぎらせてくれたのが中学校の吹奏楽

部で出会ったトランペットでした。その後、全国大会で入賞するほどの実力をつけたあきひろさん、音楽大学への進学が目標となりました。しかし、経済的な理由から一度は諦めました。そんなあきひろさんにチャンスをもたらしたのがNPOが主催するスピーチコンテストでした。事前審査に合格し、三〇〇人の観衆の前で自分の夢をスピーチすると毎月の奨学金を受け取れるというもの。今回、みごと出場者に選ばれたのです。

このスピーチコンテストを立ち上げたのは都内にあるNPO法人「ブリッジフォースマイル」です。代表の林恵子さんは八年前から児童養護施設の子どもの自立支援を続けてきました。コンテストを企画したきっかけは、施設の職員が語ったある言葉でした。

林「夢をもたせるのは簡単だけれども、私たち職員は子どもに現実的な判断をさせるために夢を諦めさせなければいけないこともあ

んなに私はつらかったですと言ふ必要は俺もないと思うよ。

——アドバイスをした石本忠次さんは一〇代のころ高校になじめず中退。将来に希望を持てませんでした。だが、信頼できる大人との出会いから立ち直り、その後、税理士になるという夢をかなえました。

信頼できる大人の大切さ

石本 「ここまで言うのはつらい」という思いが彼のなかにあって、信頼できる相手じゃないと話せないと思います。信頼できる大人がいることが最も重要ですね。

——コンテストには今も児童養護施設で暮らしている高校生も参加。高校三年生のみさきさん(一七歳)は、子どもが大好きで、夢は大学で保育士の資格を取り、この施設で働くことです。奨学金制度があり学費が最も安くなる地方の大学を受験することを決めました。みさきさんは幼いころに両親が離婚、父親は病気になる一緒に暮

らすことができなくなりました。そのため中学二年生のとき故郷を離れこの施設に入所以来、父親とはほとんど会っていません。みさきさんはスピーチのなかに父親との思い出を込めることにしました。みさき (草稿を読む) 私は一般家庭の生活を体験したことがありません。母の顔は覚えていないし、思い出も記憶にありません。昔、父に言われたことがあります。「お前、本当に小さい子の面倒見がいいよな」と。ふだん父は怒ってばかりで私のことなんて見てくれないと感じていたので、父の一言は今でも鮮明に思い出せるほどうれしい言葉でした……。

——成長した自分を父親に見てもらう。その思いを胸にコンテストに臨みます。一方の、あきひろさん。スピーチの内容を固める最後のミーティングを行いました。

あきひろ (草稿を読む) 突然の施設生活、何も知らないまま保護所に連れていかれました。ずっと



ボランティアの石本忠次さん

収録会場の早稲田大学の方と、林さん・石本さんとの質疑応答

Q1 税理士の石本さんの、「大人を信用してほしい」という言葉にすごく考えさせられました。心を開いて話してもらうために、気をつけていることがありましたら、お聞きしたいなと思いました。

石本 僕は大人だぞ、教えてあげるぞ、いくらでも僕が教えてあげることがあるんだぞ、という気持ちでずっと彼に接してきていたのですが、そういう大人に対してすごくバリアをはるというか距離をおいていくのがあきひろ君の特徴で、何度も彼に怒られたりすねられたりして、そうやっていくうちに、もう対等というか、教えてあげるのではなく一緒に

この企画をやっているという気持ちで、大人とか年齢とかは関係なくやらせていただいと、彼もすごく距離を縮めてくれることを知りました。非常に勉強になりました。
林 大人側の自己開示といいますが、大人だってこういうふうに悩んでいるとか、自分も子どものとき同じ気持ちを持っていたとか、そういうことを子どもたちは受け入れやすいと思います。

Q2 石本さんのようなボランティアを募る際にけっこう大変だと思うのですが、その工夫はどうされているのでしょうか。

林 忙しい社会人の時間を使ってもらうというところで、事務局サイドとしてはどれだけ効率的にストレスなく活動に参加していただけるかということころは非常に気をつけています。また、子どものために何かやりたいと思って来ていただく方々の思いを、できるかぎり尊重しています。

言葉で「生き生きと高らかに」という意味です。僕は九歳のとき何も知らされないまま施設に連れていかれました。当時、学校にも行けず食事をとることさえままならない生活の中、両親の不在は僕にとってなによりもつらかった。そんな苦しい生活の中、自ら音を奏でることの喜びを知り、音楽に夢中になったのです。そんな音楽の世界へと導いてくれた（小学校時代の恩師）吉原先生との出会いは僕の宝です。皆さん、このタオルを見てください。これは先日、吉原先生にいただいたものです。このタオルには一〇文字の言葉が書かれています。「音楽の才能を伸ばそう」そのたった一〇文字です。でも、この一〇文字にはたくさん思い出が詰まっています。音楽も同じです。音楽を創り出すのはたった一二の音だけ。でも、それだけで人を愛えて動かすことができる。だから僕は、今度は僕が悩み苦しんでいる人たちを音楽のす

ばらしさを伝えることで助けていきたいです。Vivo A15sonante、生き生きと高らかに！
みんなの力になる存在に
—— 続いて保育士になる夢を持つみさきさんの出番です。
みさき 私は将来、自分が育った児童養護施設で働きたいです。昔、父に言われたことがあります。「お前、本当に小さい子の面倒見がいいよな」と。ふだん父は怒ってばかりいて私のことなど見てくれないと感じていたので、その父の一言は今でも鮮明に思い出せるほどうれしい言葉でした。自分のことを見てくれている人がいるというこの喜びを、施設の子どもたちにも感じてもらいたいです。施設の子たちはみんな頑張っています。寂しさつらさを小さな体で受け止め未来を築いていこうとしています。みんなの存在が私の力になりました。いつか私の存在がみんなの力になりますように！

内藤 本番のほうがすごく伝わってきて、ジーンときちやうね。
津田 苦しんでいる子たちに対して大人がやれることは二つ。一つは話を聞いてあげること。石本さんみたいに、とにかく同じ目線に立って話を聞いてあげること。もう一つは、吉原先生のようにきっかけを与えてあげることですね。
林 こんなに多くの人たちの応援を得て頑張っているという姿が、今、施設にいる子どもたちの気持ちを愛えていくと思っています。
今はまだ東京、千葉、神奈川、埼玉の全都三県でしか私たちの活動ができていませんが、同じような支援を待っている子どもたちは全国にいるんですね。こういった希望格差を抱えている子どもたちが早く進学の夢をかなえられたらいいなと思います。どんな環境で生まれ育っても、夢があればかなえていいと言ってあげられる社会にしたいですね。

あきひろさん



みさきさん

【図2】 応援のためのSNSを活用したさまざまな仕組み



一緒にいた兄弟とも離ればなれになり、この生活が自分にとって新しい「希望」なのか、それとも「暗闇」なのか……。
石本 ここがちよっとわかりづらと思うんだよね。こんなところに連れていかれるという「暗闇」はわかるんだけど。それを「希望」と感じるというのは、どういう気持ちだったのかなと……。
あきひろ ちゃんと電気、水道が通っているところでちゃんとご飯を食べられるというのは、僕にとってはいいことだよ。
石本 施設に入ることを「希望」と感じるというのは、そんな深い意味があると思わなかった。
—— 石本さんたちボランティアと議論を積み重ね、あきひろさんは自分を見つめ直すとともに大人を信じる力を取り戻したといえます。
あきひろ 大人ってこんなにも頼りがいがあるんだなって。話したくないことでもこの人にだったら話せるかなって実際思えるよね。

内藤 僕も、中学校のころですけど、ちよつといじめでつらい思いをしていたときに、気づいてくれた先生がいたことを思い出しました。だからすごく共感できたよね。
本場に信頼できる大人は大切だよ。
山田 ブリッジフォースマイル代表の林恵子さんに、一人の子どもに対してチームでサポートしてあげる意図を伺います。
林 三〇〇人の前でスピーチをするという大変さを、子ども一人でも切り切れないんじゃないか、誰かの支えが必要なんじゃないかというところから始めました。
SNSと夢チケット
山田 林さんたちは児童養護施設で暮らす子どもたちの現状を知ってもらいたいとさまざまな仕掛けをしています【図2】。
一つ目はツイッターによる情報発信です。コンテストの出場者は施設での暮らしや自分の思いをツ

weetして、応援する人を増やしていきます。二つ目は夢チケットによる寄付。スピーチコンテストの観客は五〇〇〇円の夢チケットを購入し、この収益が出場者たちへの奨学金にあてられます。三つ目は継続的な交流の場。支援者はコンテストの後もSNSなどを使って子どもたちと交流、無事に卒業するまでを見届ける仕組みです。
津田 夢チケット、いい仕組みですね。いいスピーチを聞けるイベントの対価として、結果的に寄付になる。気持ちよくおカネも出せますよね。

—— スピーチコンテストの会場は夢チケットを購入した観客三〇〇〇人余りが詰めかけ満員になりました。あきひろさんのスピーチです。
夢をかなえるために
あきひろ 僕には夢をかなえるために大切にしている言葉があります。Vivo A15sonante、音楽の